

釈尊（お釈迦様）

出典：浜島典彦監修

『日蓮を読み解く八〇章』ダイヤモンド社

日蓮聖人が天台僧蓮長として学んだ当時の比叡山は、人は誰でも悟りに至る智慧を本来持っているとする本覚思想の観心主義が体系化されつつある時期でした。古い天台の本覚思想は、慧心流（観心門）と檀那流（教相門）の□伝によって伝承された二つの流派がありました。

このような観心主義的な学風の中で修行しながら、なぜか蓮長は教相主義的な傾向へと進んでいった。その理由はいくつか考えられる。その第一は、雑乱した今日の□イのあり方は天台大師智顛・伝教大師最澄の法華一乗の仏教精神に反しているのではないかという疑問である。雑乱□イへの批判は蓮長を本覚思想否定の方向へ走らせたのではないだろうか。

第二は□□救済の願いである。蓮長の求道の目的は釈尊の真実の教えを知ることであった。それは単なる知識の取得ではなく、一切□□を導き、そして救済する無上の教えに生きることの意味していた。それが蓮長にとって出家者としての当然の姿であったのである。その自覚と使命感に燃えていた蓮長が、日現実的な論理をもてあそぶ観心主義の学問の中にいつまでも沈潜しているはずがなかったと言えよう。